

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 239 集

周防畑遺跡群

南上北原遺跡

長野県佐久市長土呂南上北原遺跡発掘調査報告書

2016.03

佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する周防畑遺跡群南上北原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は有限会社田園不動産が行う宅地造成工事に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 南上北原遺跡（NKN）佐久市長土呂字南上北原 930 - 1、933 - 2、936 - 5
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：平成 27 年 9 月 28 日～10 月 5 日
整理：平成 27 年 10 月 6 日～平成 28 年 3 月 18 日
調査面積：256m²
- 5 本書に掲載した地図は佐久市役所発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
- 6 遺構測量は簡易遣り方で、遺物実測は手取りで行った。図面のトレースは AdobeIllustrator で行った。遺構・遺物の写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、AdobePhotoshop で補正等を行った。編集は AdobeInDesign で行った。
- 7 本書の作成・編集は小林が行った。
- 8 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴住居址－H、掘立柱建物址－F、土坑－D、ピット－Pである。
- 2 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。
- 3 遺構の海拔標高は、遺構毎に統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記してある。また、土層の色調は 1999 年版「新版 標準土色帖に基づいた。
- 4 遺物挿図番号・遺物写真番号は一致する。
- 5 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたが、間隔は 4 m × 4 m で設定した。
- 6 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。

目 次

例言・凡例

目次

I 発掘調査の経緯	2
1 経過と立地	2
2 調査体制	2
II 遺構と遺物	3
1 竪穴住居址	3
2 掘立柱建物址	8
3 土坑	9
4 ピット	10
5 遺構外出土遺物	10
6 まとめ	10

写真図版

抄録・奥付



第 1 図 南上北原遺跡位置図（1：50,000）

I 発掘調査の経緯

1 経過と立地

南上北原遺跡は、佐久市の長土呂地籍に所在し、周防畑遺跡群の中ほどに位置する。遺跡は、佐久地方北部に特徴的な田切に挟まれた台地上に立地し、標高は720 m前後を測る。

遺跡の周辺では、本遺跡の西北方向に展開する南下北原遺跡で3次にわたる調査が行われており、奈良・平安時代の集落跡が発見されている。重要な遺物として、1次調査において「刑部仁丸」と墨書された土師器碗が出土している。佐久地方で古代の人名が記された遺物は、銅及び石製の私印3点が認められるだけであり、極めて貴重な発見と言える。南下北原の南に位置する渋右エ門地籍からは、貞観八年(866年)に定額寺となった「妙楽寺」に由来するであろう布目瓦が出土している。間接的ではあるが郡衙にも関連する事柄であり、佐久地方の古代史を考える上で、この地域の重要性を改めて認識させるものである。

今回、遺跡群内で有限会社田園不動産により宅地造成が計画されたため、遺構の確認を目的とした試掘調査を実施した。その結果、奈良・平安時代の集落跡が確認された。保護協議を行い、遺跡の保存が不可能な部分について記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

2 調査体制

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	糊澤晴樹		
事 務 局	社会教育部	部 長	山浦俊彦		
	文化振興課	課 長	小林 聖		
	文化財調査係	企 画 幹 係 長	三石 建		
		係	大塚広樹		
		調査担当者	小林真寿	富澤一明	上原 学
		調 査 員	神津一明	生島修平	
			小林真寿		
			浅沼勝男	甘利隆雄	岩松茂年
			小島 真	小林敏雄	山田叔正
			油井満芳	横尾敏雄	依田好行

II 遺構と遺物

1 竪穴住居址

(1) H1号住居址(第4図) 調査区西端で検出された。北東隅の一部を調査しただけであり、全容は不明である。調査部分には他遺構との重複関係は認められない。深度65cmの規模である。壁下には一部周溝が認められ、床面上で1基、掘方で1基のピットが検出されたが、性格は不明である。

出土遺物には須恵器坏と有台坏が認められる。いずれもロクロからの切り離しはヘラである。有台坏の外底にはヘラ記号が認められる。

以上の出土遺物から本址の年代は聖原編年の奈良・平安時代のIないしII期と考えられ、8世紀前半に否定される。

(2) H2号住居址(第8図) IID・E10グリッドで検出された。ピット2基に切られ、H3号住居址を切る。N-19°-Wに長軸方位をとり、長軸長4.2m、短軸長3.58m、深度0.3mの規模である。住居中央部に東西方向に配置されたP1・P2の2基が支柱穴で、φ16~20cmの柱痕が観察された。カマドは北壁の中央部に構築されているが、掘方状態に破壊されていた。

出土遺物には、土師器・須恵器・石器があり、土師器には坏(1~3)、皿(4)、鉢(14)、甕(15~19)の器種がある。坏・皿はすべて内面にヘラミガキ後黒色処理が施され、外面に墨書が認められる。1が「田」、2が「吉」であるが、他の2点は不明である。14は内面に黒色処理が施されるため、鉢としたが、器形的には須恵器甕と同形態である。甕はすべて武蔵甕で、口縁部は「コ」の字ないし「コ」の字気味である。須恵器には坏(5~12)、有台坏(13)、甕(20)

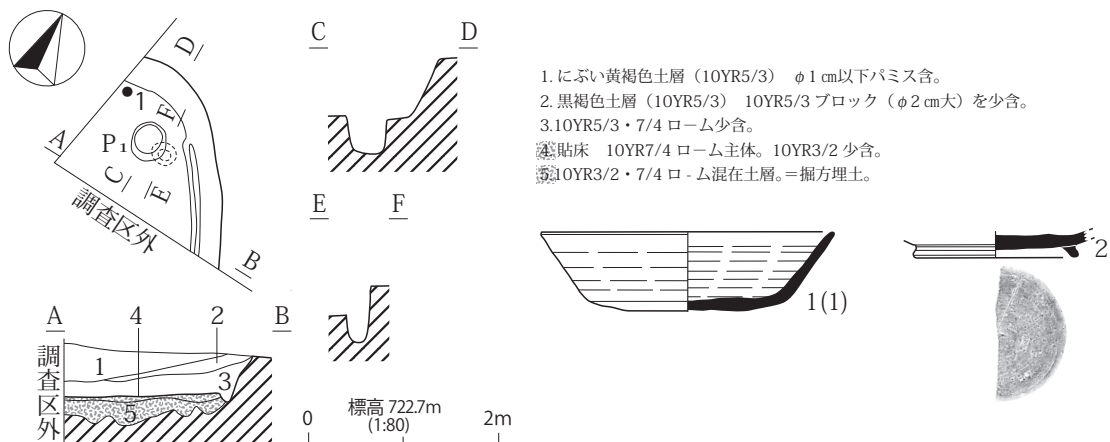


第2図 周辺遺跡位置図 (1:5,000)

～22)、壺(23)の器種がある。坏・有台坏のロクロからの切り離しは、右回転の糸切である。また、火禿が顕著である。有台坏13は煤の付着から灯明に使用された事が推測される。甕は叩き成形によるものである。壺は長頸壺であろう。石器は磨・敲石(26)、敲・凹石(27)、突臼(24・25)の器種がある。突臼2点は住居東西壁の中間に伏せた状態で出土した。臼以外の用途に使われていたのかもしれない。

以上の出土遺物から、本址は聖原編年の奈良・平安時代V期に比定され、9世紀前半の実年代が想定される。

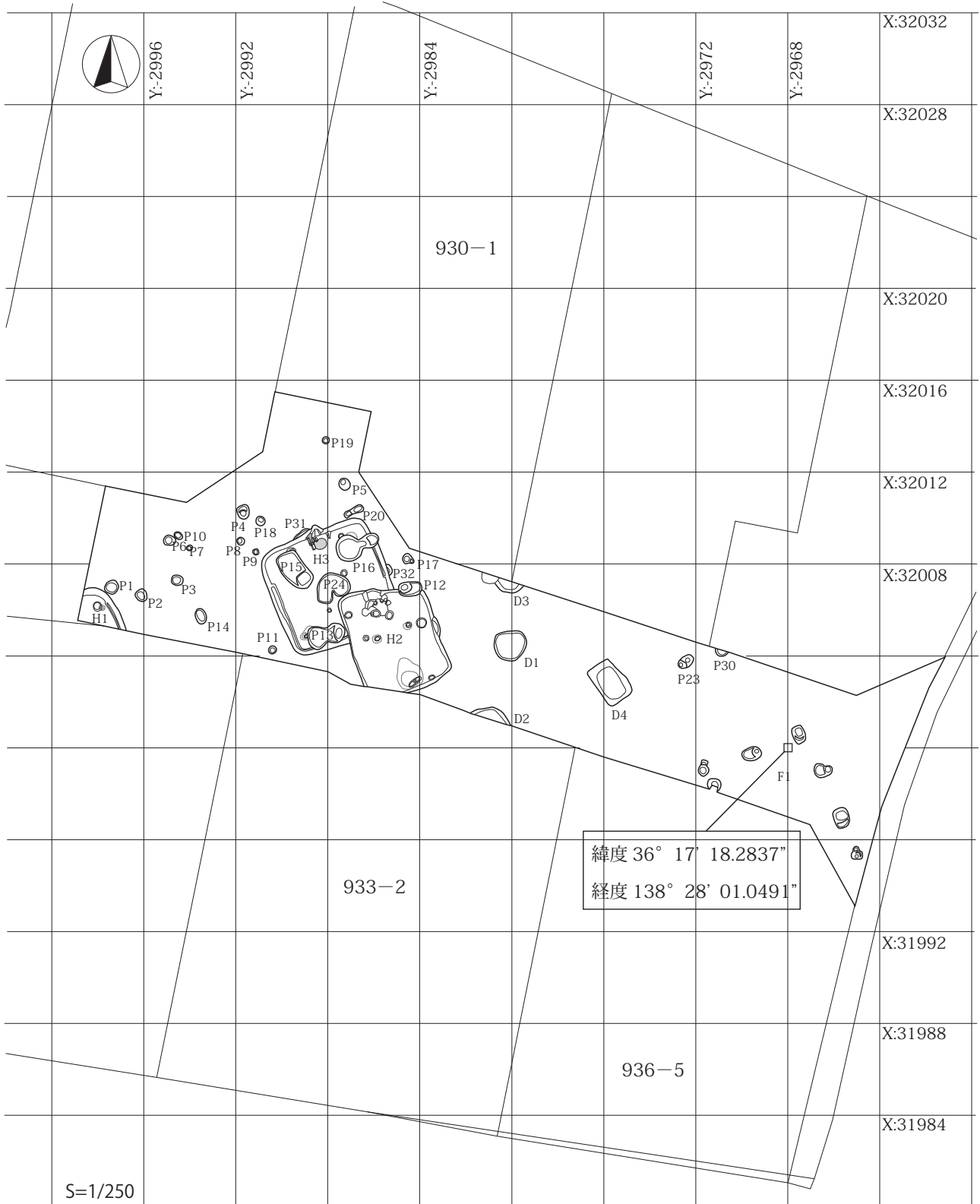
(3) H3号住居址(第図) II F 9グリットで検出された。H2号住居址、ピットに切られる。N-16°-Wに長軸方位をとり、4.5m×4.5mの隅丸方形の平面形を呈し、0.6mの深度を測る。東壁下中央部分及び、南壁～西壁下の南東・北西隅を除く部分に周溝がめぐる。カマドは北壁中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されているが、半壊状態であった。支柱は4隅寄りに4本が均等配置されており、柱痕はφ20cm大である。住居床面中央やや東寄



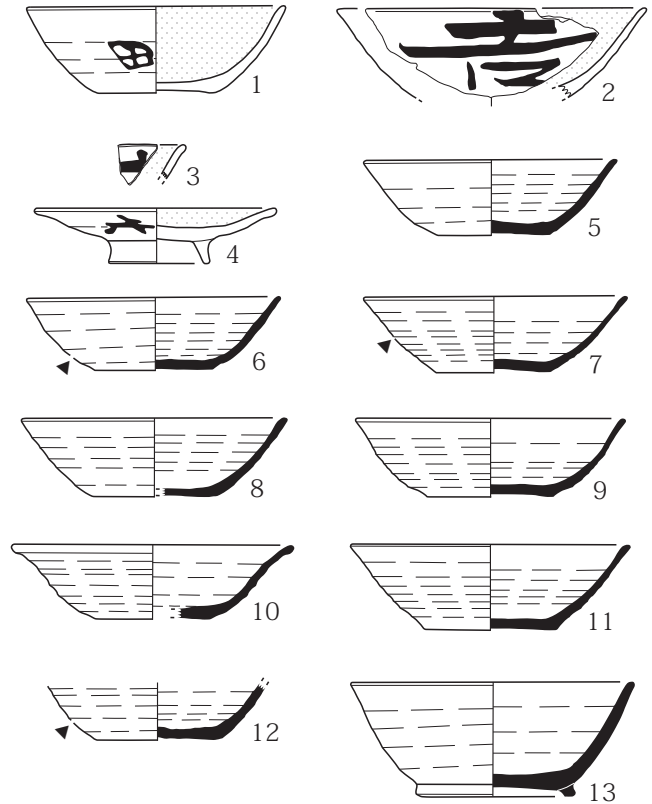
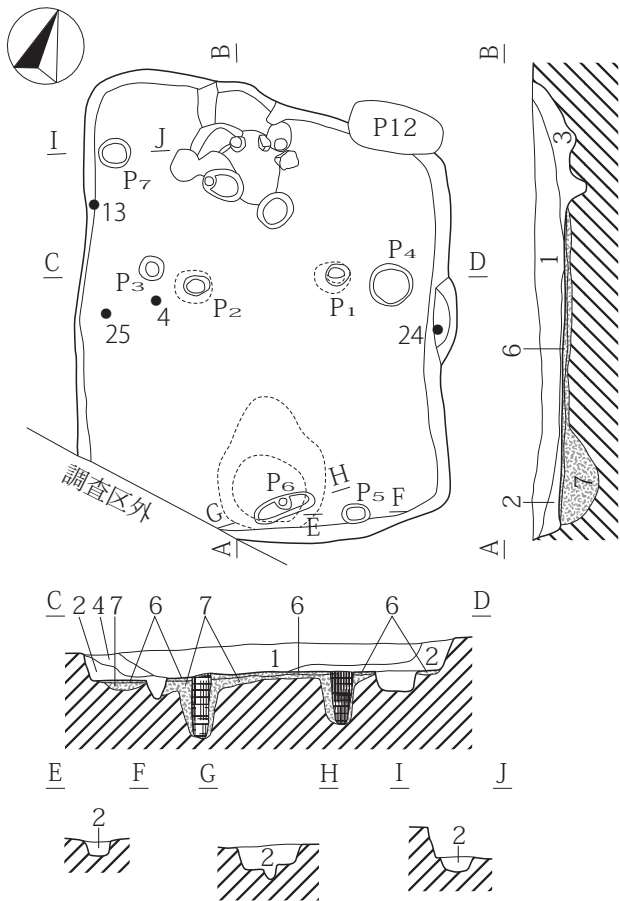
第4図 H1号住居址

りの床下から南北 2.5 m × 東西 3 m × 深度 0.4 m の規模を有する旧住居址が検出された。柱穴は認められず、西半の壁下に周溝がめぐり、北壁中央部分にカマドが構築されているが、掘方状態であった。

出土遺物には土師器・須恵器・石器・鉄製品があり、土師器には鉢（7・8）、甕（9～14）、壺（15）の器種が認

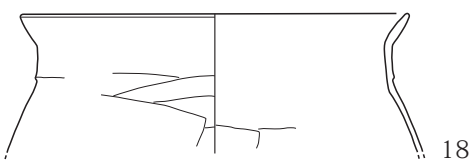
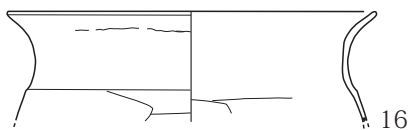
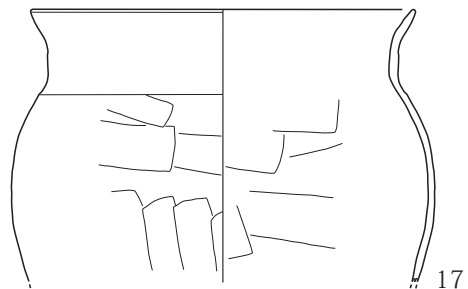
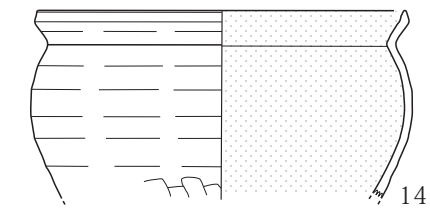
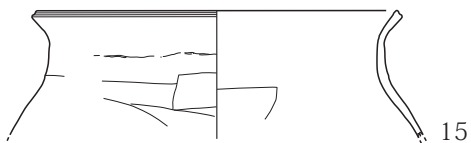


第3図 遺構配置図 (1 : 250)



1. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR7/4・φ1 cm以下パミス少含。
2. 10YR3/2・5/3の混在土層 10YR7/4口・ム含。上面床状に固い。
3. 2層中に焼土粒子を含。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4口・ム少含。
5. 10YR7/4口・ム主体 10YR3/2少含。
6. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/4口・ム少含。貼床。
7. 10YR7/4口・ム主体 10YR2/2・5/3少含。
8. 柱痕。

0 標高 722.60m (1:80) 2m



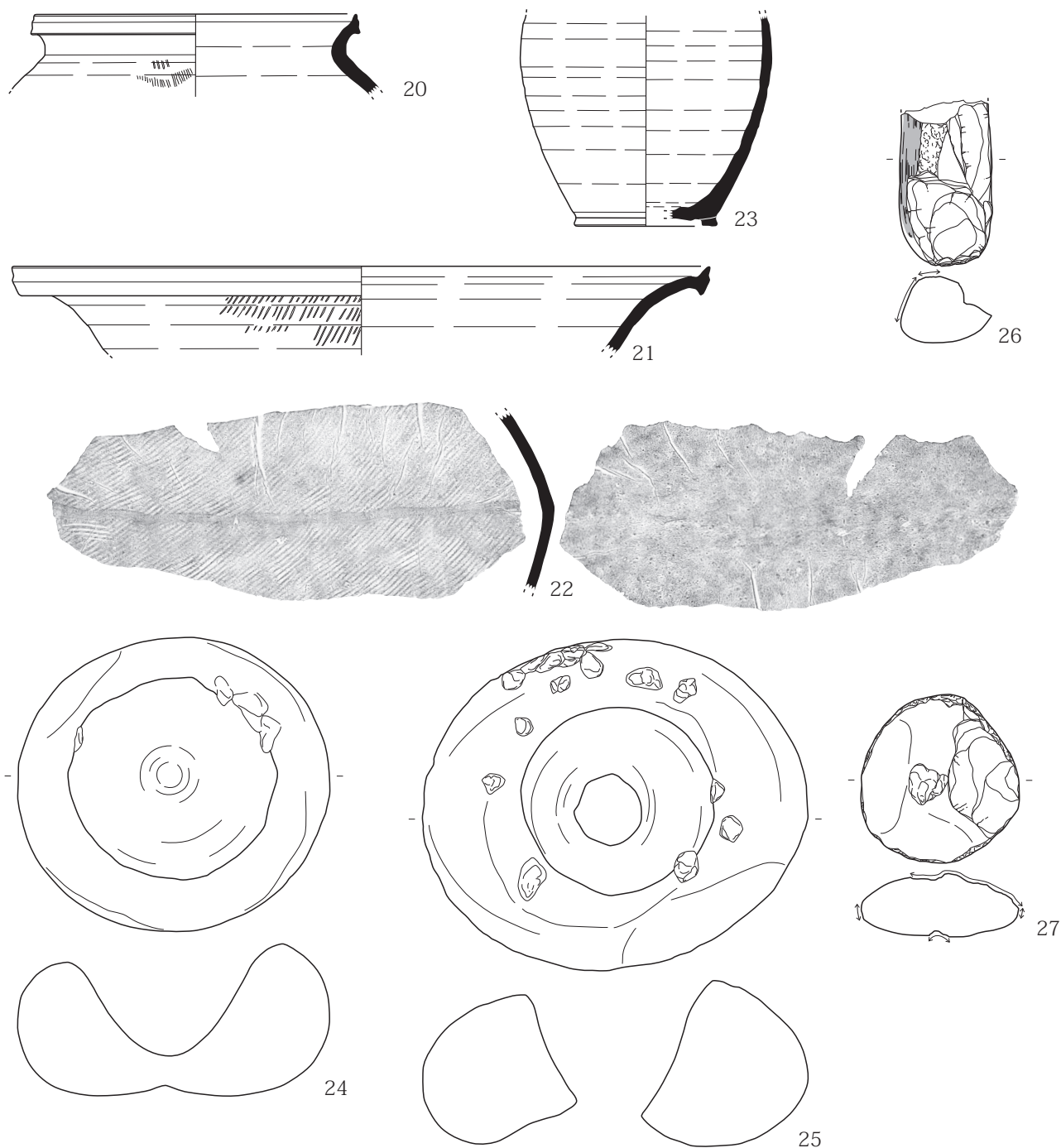
第5図 H2号住居址 (1)

められる。鉢は広口で丸底の形態で、8は内面黒色処理が施される。甕はすべて口縁部が「く」の字形態の武蔵甕である。壺は器壁が厚く、内外面ともにヘラケズリ調整後にヘラミガキが施されている。須恵器には坏(1・2)、有台坏(3)、坏蓋(4・5)、高盤(6)の器種が認められる。坏・有台坏のロクロからの切り離しはヘラによる。石器は突臼(16)、打製石斧(17)、磨石(18)、磨・敲石(19)の器種が認められるが、打製石斧は混入であろう。鉄製品20は器種不明である。

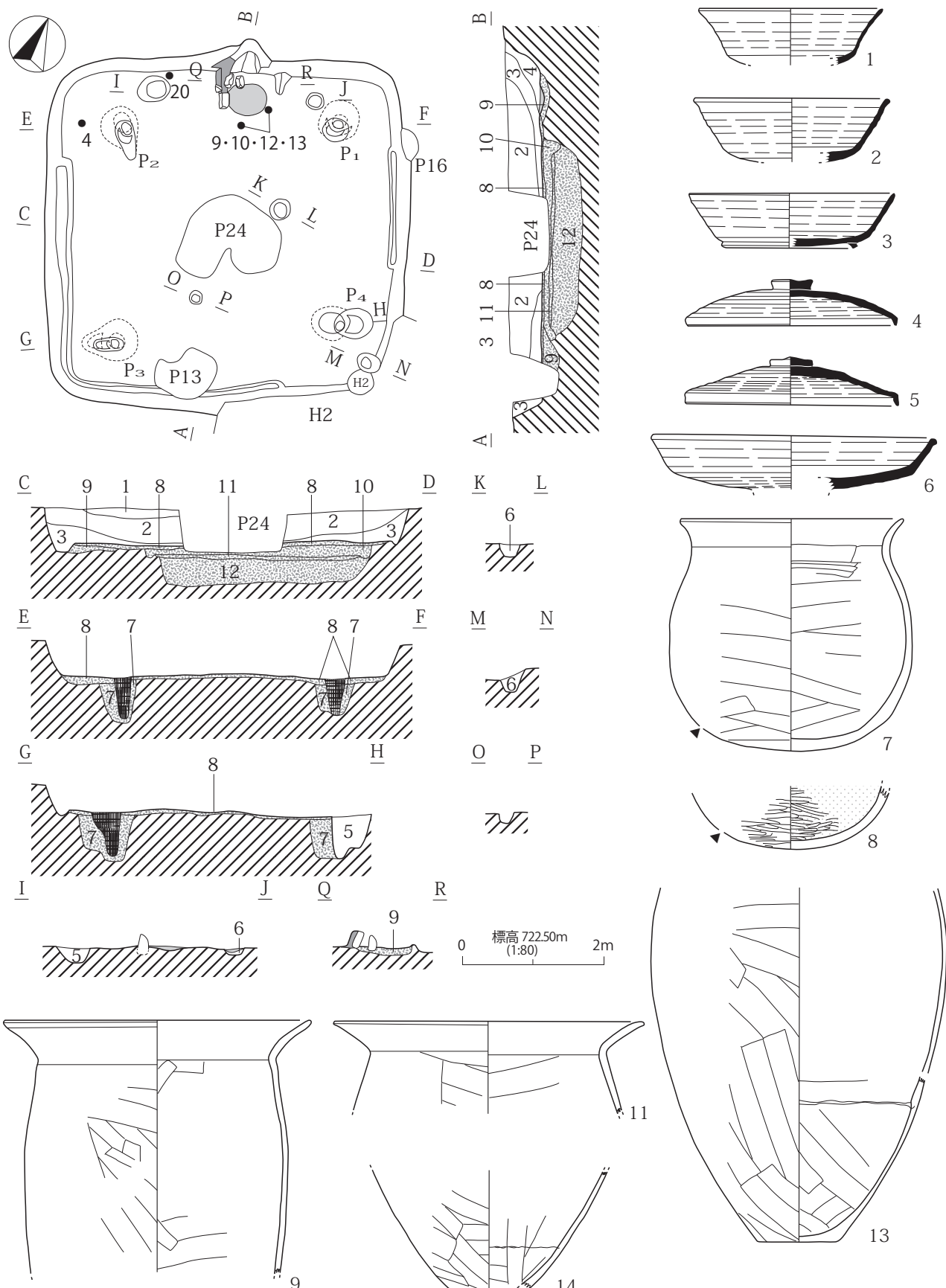
以上の出土遺物から、本址は聖原編年の奈良・平安時代Ⅱ期に比定され、8世紀第Ⅱ四半期の実年代が想定される。

2 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址(第図) III J 1グリットで検出された。調査区外にのびるため全容は不明である。また、



第6図 H2号住居址(2)



第7图 H3号住居址(1)

数多くのカクランによる破壊を受けており、上端は一定しない。梁行2間×桁行3間の側柱の形態で、柱穴の平面形は長方形、断面はテラスを有する逆梯形である。N-25°-Wに長軸方位をとり、梁行4.5m×桁行6m×深度0.8mの規模である。

3 土坑

(1) D1号土坑(第図)ⅡB9グリットで検出された。平面は不整な円形、断面は逆梯形を呈する。N-60°-Eに長軸方位をとり、1.29m×1.19m×0.16mの規模を有する。

出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

(2) D2号土坑(第図)ⅡC10グリットで検出された。南方向に調査区外にのびるため全容は不明である。逆梯形の断面形を呈し、深度0.3mの規模である。

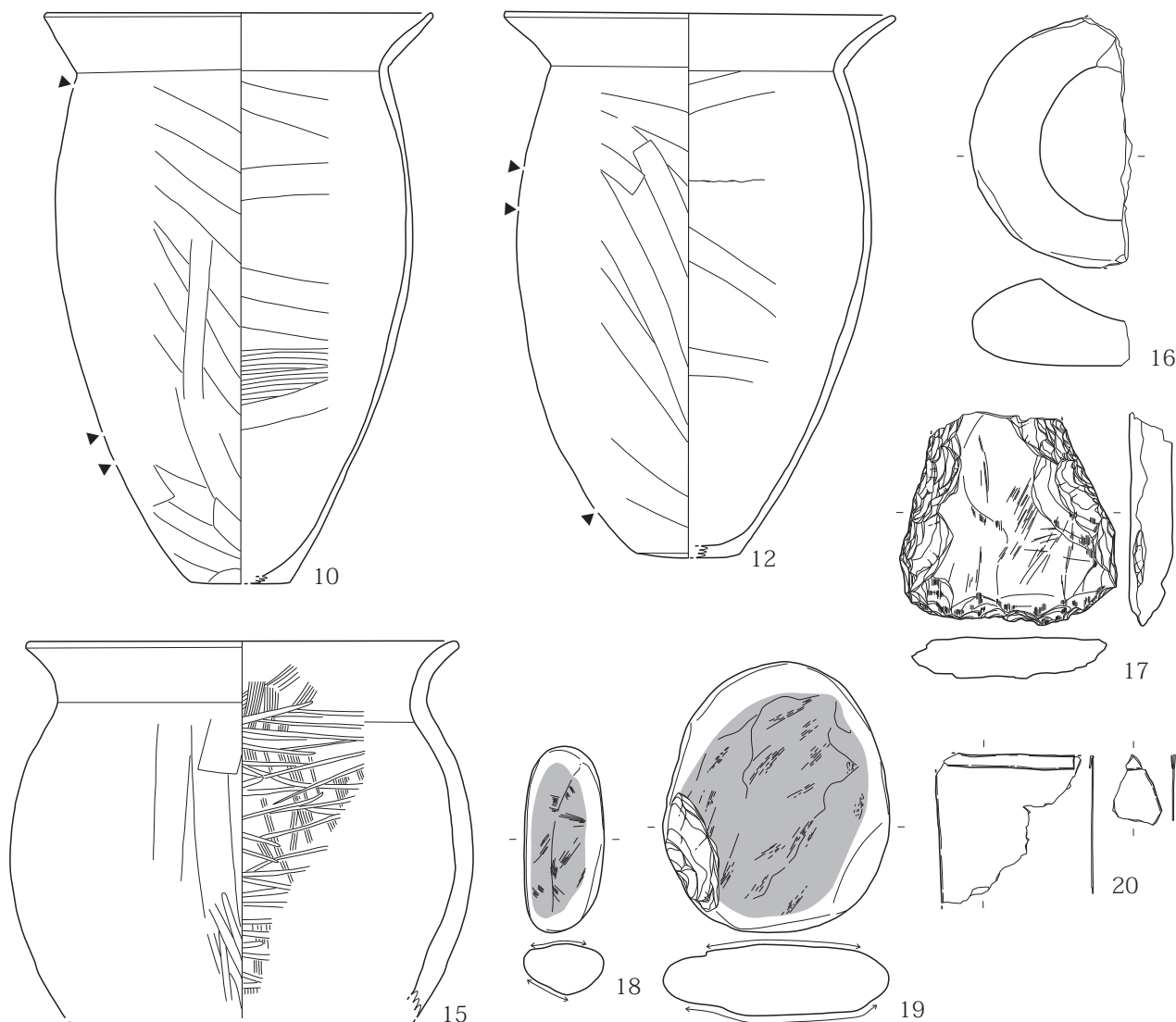
内面黒色研磨で、外面に判読出来ない墨書が認められる土師器坏片が1点出土している。平安時代の所産であろう。

(3) D3号土坑(第図)ⅡC9グリットで検出された。北方向に調査区外にのびるため全容は不明である。なべ底の断面形を呈し、深度0.14mの規模である。

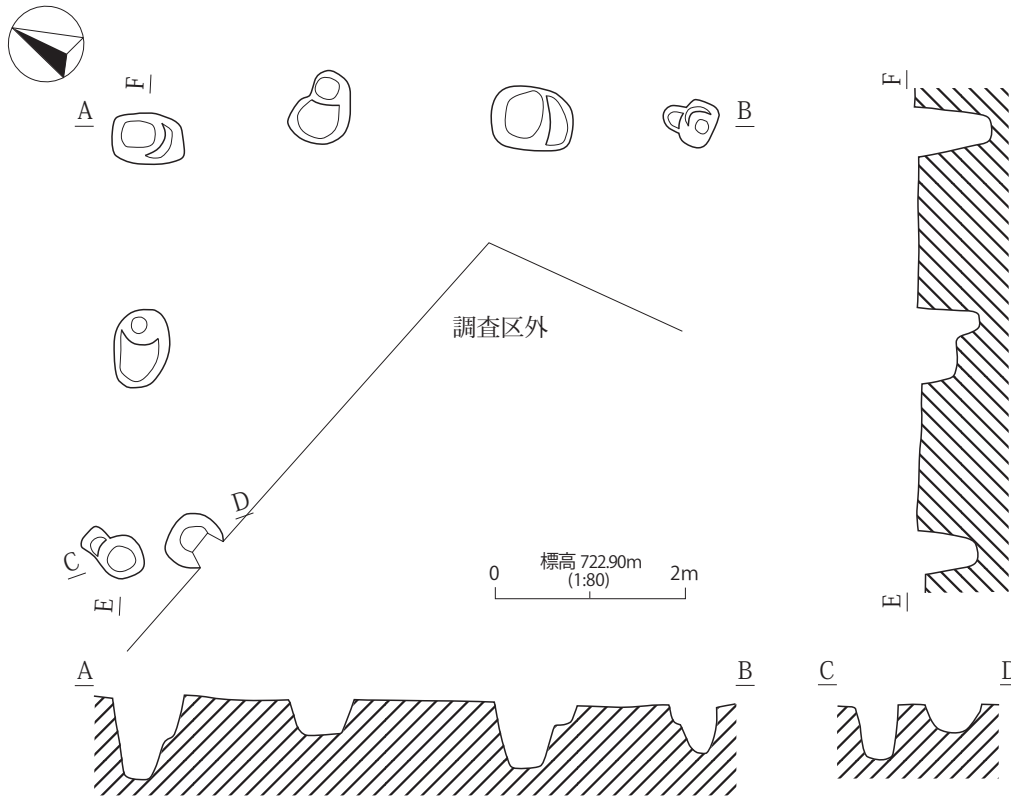
出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

(4) D4号土坑(第図)ⅡA10グリットで検出された。平面は長方形、断面は逆梯形を呈する。N-55°-Eに長軸方位をとり、1.85m×1.3m×0.78mの規模を有する。

内面黒色研磨で、外面に判読出来ない墨書が認められる土師器坏片、須恵器長頸壺の頸部片が出土している。平安時代の所産であろう。



第8図 H3号住居址(2)

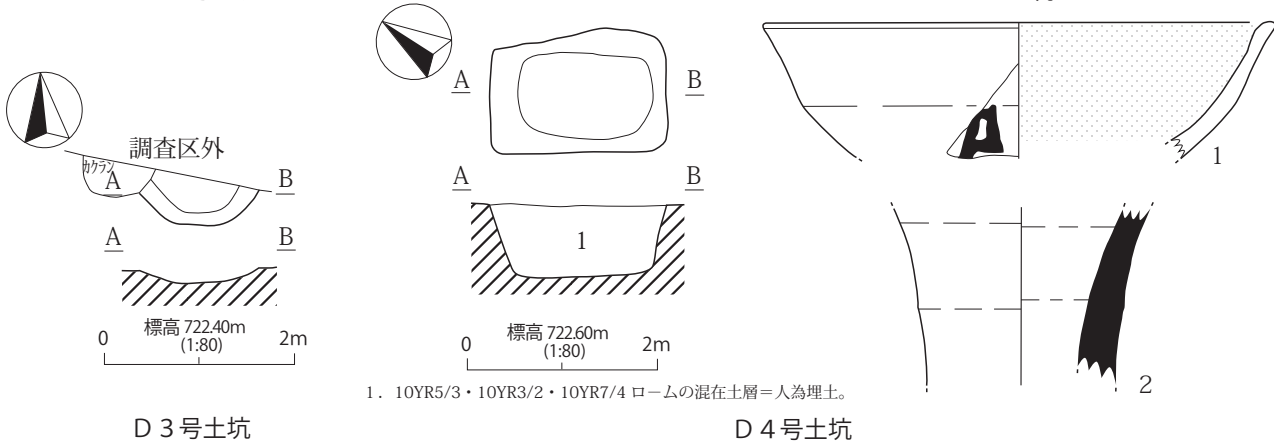


第9図 F1号掘立柱建物址



D1号土坑

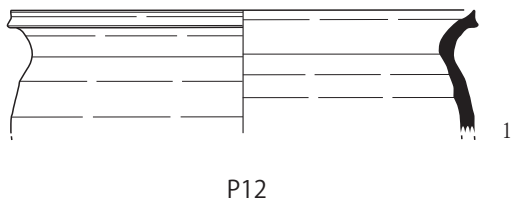
D2号土坑



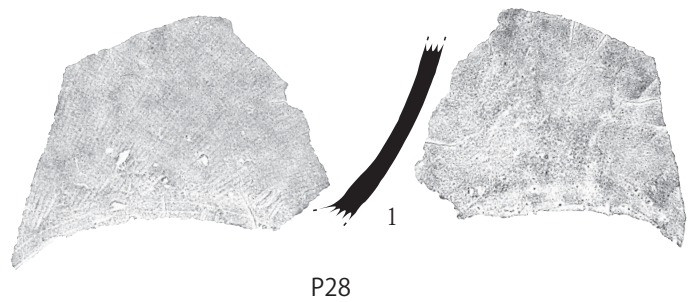
D3号土坑

D4号土坑

第10図 D1・D2・D3・D4号土坑

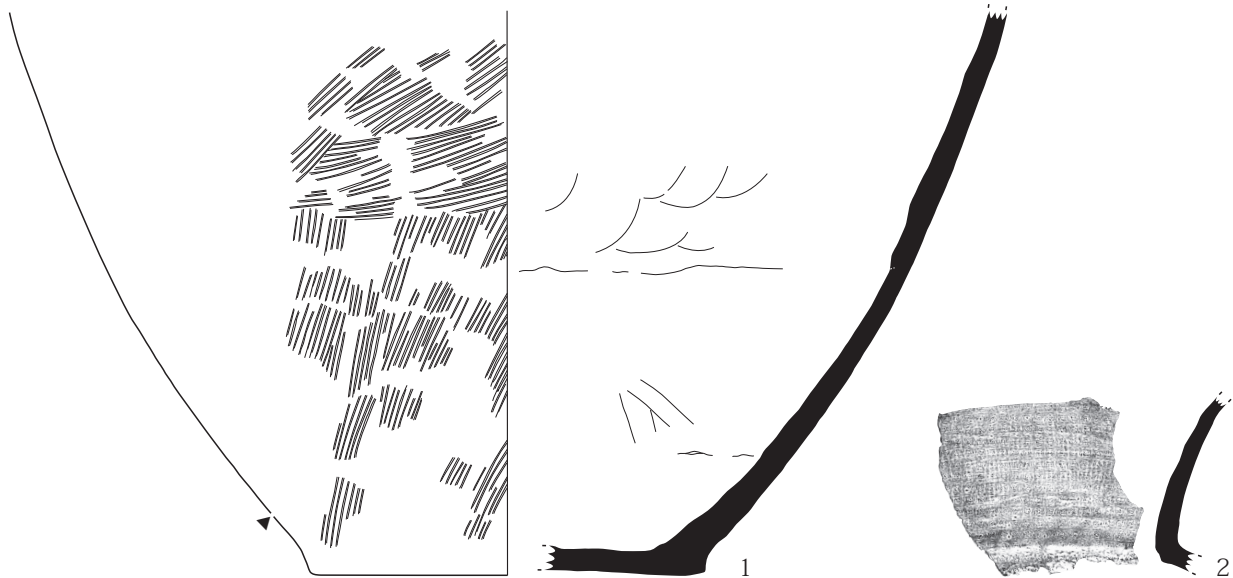


P12



P28

第 11 図 ピット出土遺物



第 12 図 遺構外出土遺物

4 ピット

H 3 号住居址の周辺を中心に 25 基が検出されている。H 3 を切るものは規模が大きく、南方向の調査区外に展開し、掘立柱建物址を構成する可能性もある。その他のものは円ないし楕円形の平面形で断面は逆梯形である。

出土遺物は P12、P28 で須恵器の甕片が各 1 点出土している。奈良・平安時代という大まかな時期を比定しておきたい。

5 遺構外出土遺物

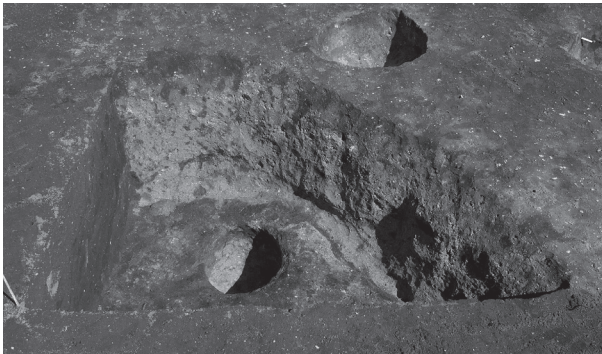
須恵器甕が 2 点出土している。1 は底部、2 は頸部である。いずれも、外面には平行叩目が認められ、内面は当具痕の上からナデ調整が施されている。詳細な時期比定は困難であり、大まかに奈良・平安時代としておきたい。

6 まとめ

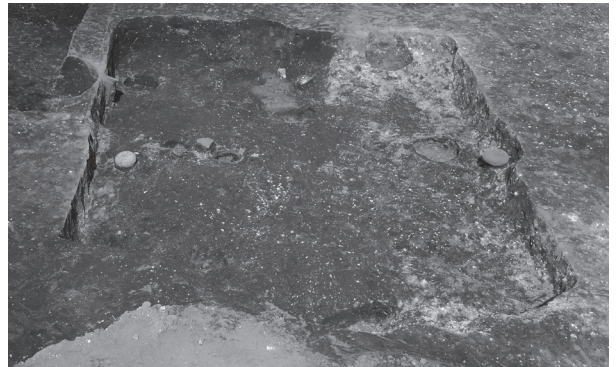
H 3 号住居址の旧住居の存在を考えると、この遺跡に人々が暮らし始めたのは、奈良時代第 I 四半期に遡る可能性が強い。継続して第 II 四半期までは集落が営まれるが、半世紀程断絶するようである。その後、9 世紀に入り再度集落が営まれるようである。出土遺物には特別なものは認められないが、鉄器が皆無である事、3 点出土した突臼の存在、比較的多量の墨書土器の出土が本遺跡の特徴であろうか？いまだ所在地を確定できない佐久郡衙の候補地のひとつであり、瓦葺の古代寺院—妙楽寺跡に近く、私印 3 点を除けば佐久市で唯一の古代の人名「刑部仁丸」が記された土器が出土した南下北原遺跡に隣接する当遺跡を含めたこの付近一帯が、古代佐久地方の歴史解明のための重要地域であることは言うまでもないことであり、慎重な調査を積み重ねて行くことが何よりも大事なことであろう。



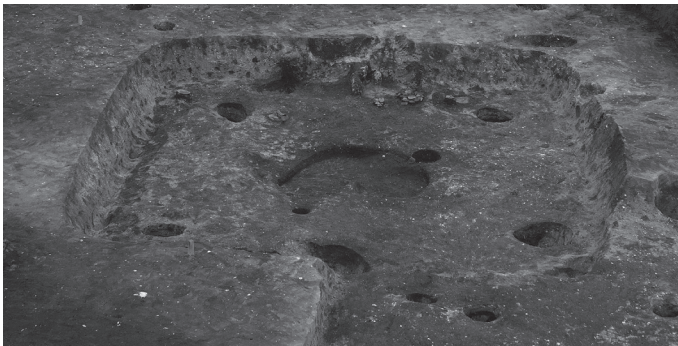
遺跡全景



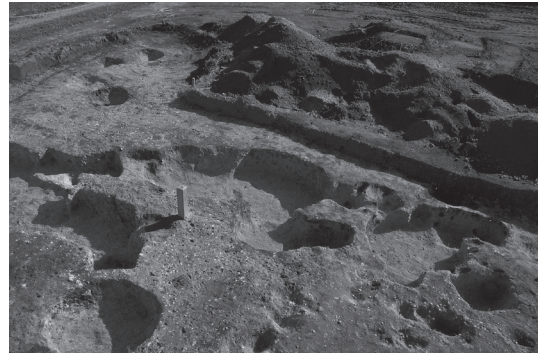
H 1 号住居址



H 2 号住居址



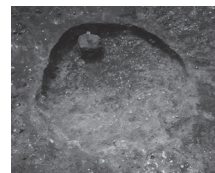
H 3 号住居址



F 1 号掘立柱建物址



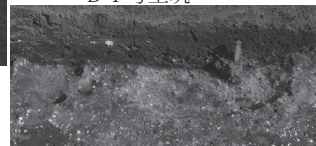
H 2・3 号住居址掘方



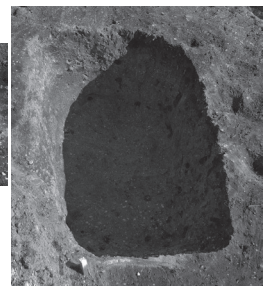
D 1 号土坑



D 2 号土坑



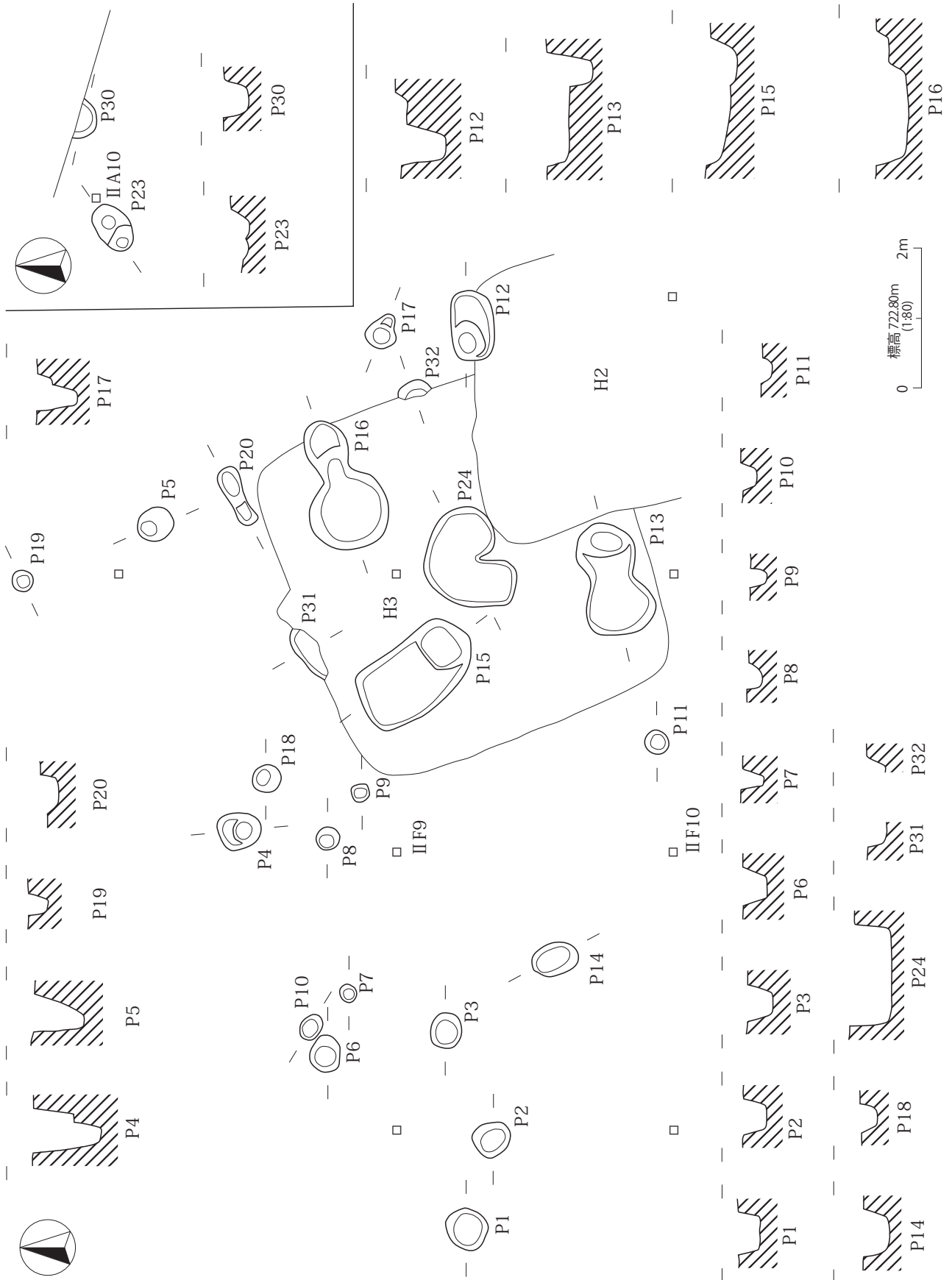
D 3 号土坑



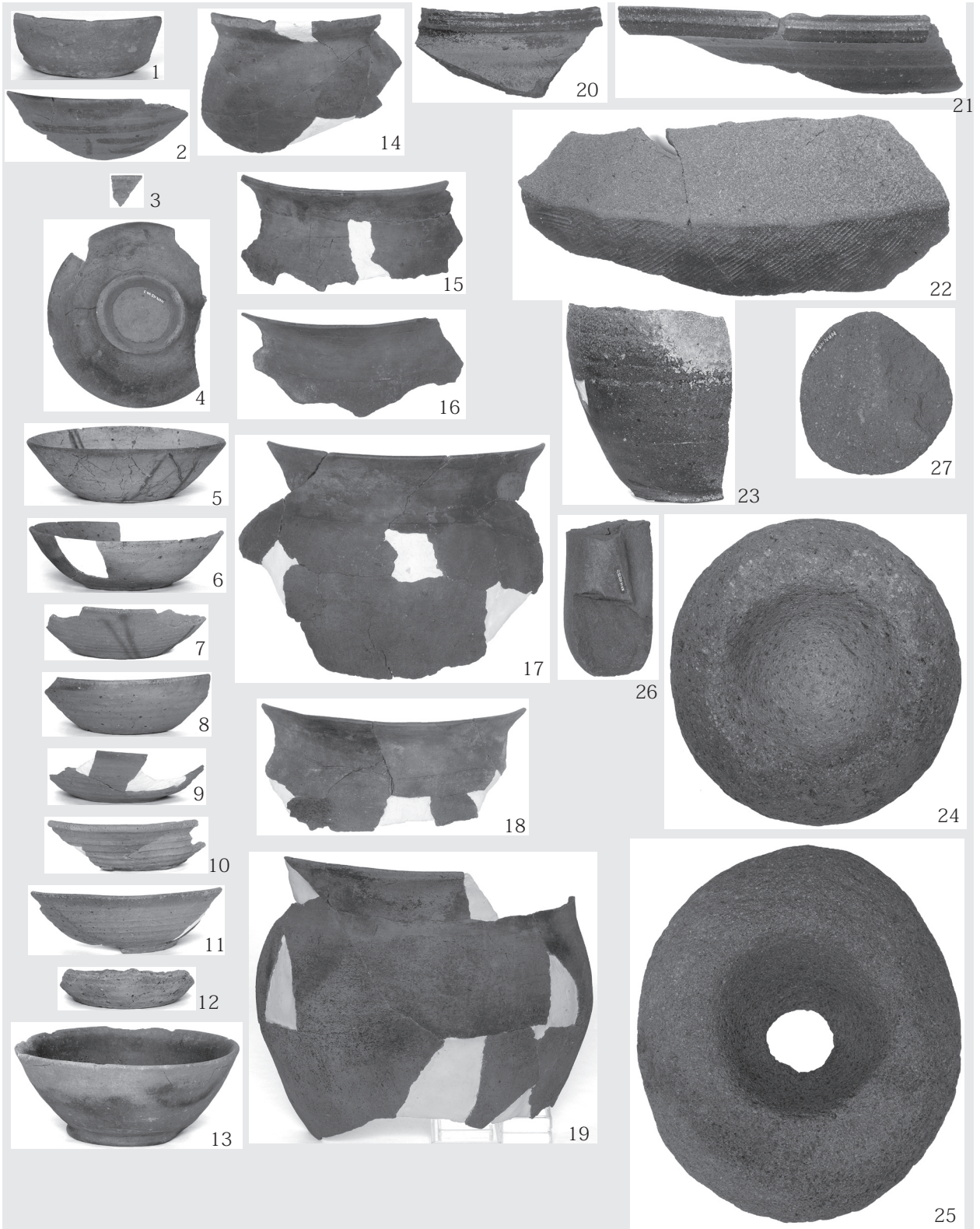
D 4 号土坑



H 1 号住居址出土遺物



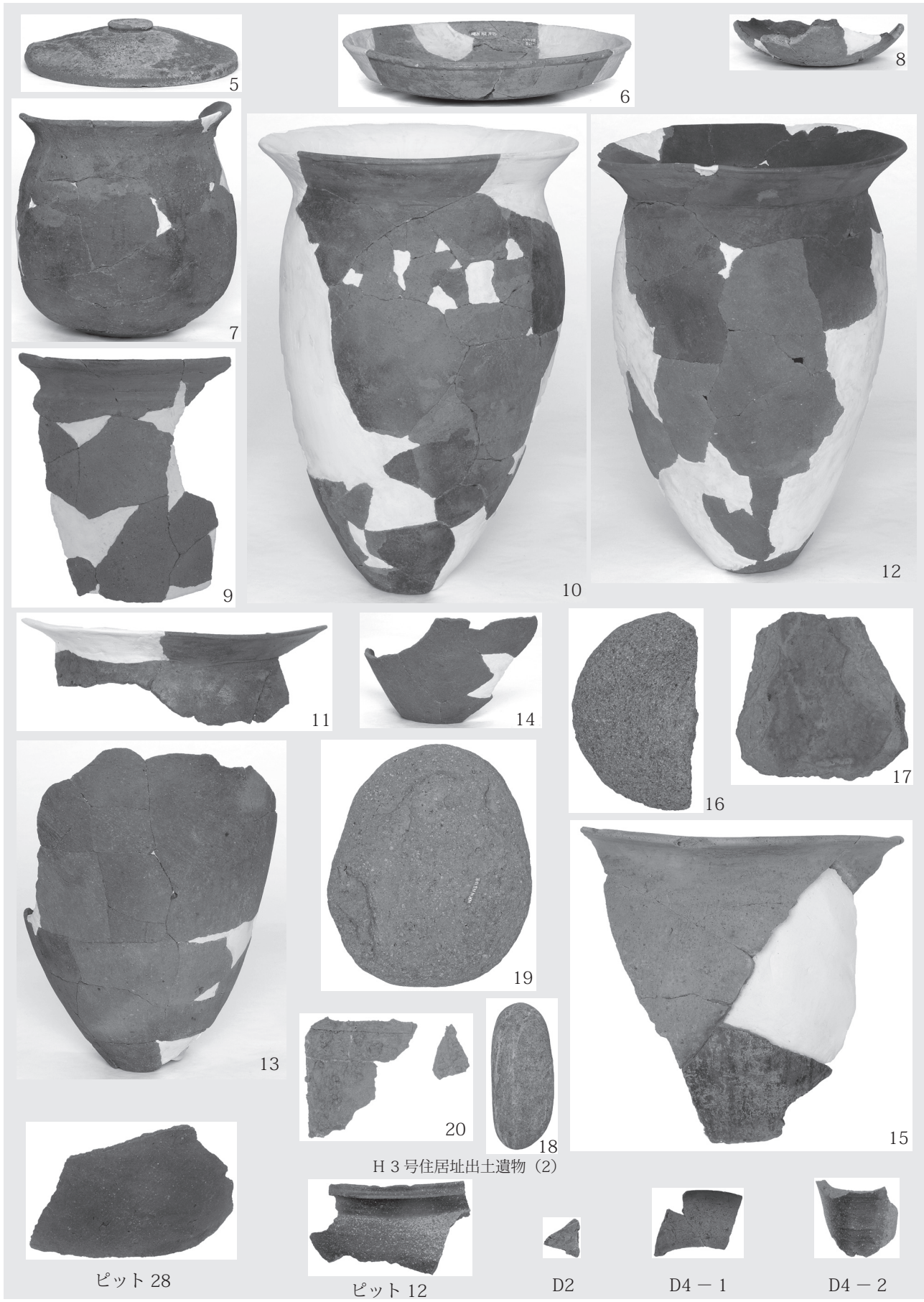
第13図 ピット



H 2 号住居址出土遺物



H 3 号住居址出土遺物 (1)



H 3号住居址出土遺物 (2)

ピット 28

ピット 12

D2

D4-1

D4-2



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみかみきたはらいせき							
書名	南上北原遺跡							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第239集							
編著者名	小林 眞寿							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課 文化財事務所							
所在地	長野県佐久市志賀 5953 TEL0267-68-7321 FAX0267-68-7323							
発行年月日	2016年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すぼうばたいせきぐん みなみかみきたはらいせき	さくしながとろ	20217	7	36° 17' 18.2837"	138° 28' 01.0494"	20150928 ～ 20160318	256	宅地造成
周防畑遺跡群 南上北原遺跡	佐久市長土呂 930-1 他							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
周防畑遺跡群 南上北原遺跡	集落址	奈良 平安	住居址 3 軒 掘立柱建物址 1 棟 土坑 4 基		土師器・須恵器・石器・石製 品・鉄器			
要約	奈良・平安時代の集落址。建て替えが行われている H3 号住居址の旧住居址の掘方は深さ 30cm を超えている。H2 号住居址からは突白が 2 点出土した。住居址の東西壁の中央に相対するように置かれた位置や、底が抜けるまで使い込まれた状況が特異である。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第239集
南上北原遺跡
平成28(2016)年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込 3056
社会教育部 文化振興課文化財事務所
〒385-0006 長野県佐久市志賀 5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限会社